



琵琶歌
新曲

哈爾濱

末松子爵
佐々木信綱
森槐南題詩
牧野錦光作譜
下村無端作歌

259
958



歌 曲 新 集
賓 爾 哈

詩題南槐 森 閱校爵子松末
譜作光錦野牧 閱綱信木佐佐
歌作端無村下

博文館 寄贈本



一京市本町三丁目
博文館出版

特23
235



檀槽淚溢四絃
哀氣薄滄雲林
木摧君識魯公
門下士百年風
雪哭西臺

下村君屬

森大來題



はしがき

出でて平和の保障たり入つて國家の柱石
たり仰いて無上の君寵を荷ひ俯して一代
の勢望を鍾めたるの人、極東百年の大策に
資せんと、して偶々北滿の嚴霜を陥み、遺憾
兇豎の毒手に落ず、其最期の壯烈は實に我
大和民族の永劫に忘るべからざるところ、
手が敢て此歌を草する所以の者、豈徒らに
事を好んでならんや、あゝ豈事を好んでな
らんや

明治四十二年臘月

無端しるす

曲符の解

、……………中干

●……………大千

△……………吟替り

◎……………切り

┌……………句切り

琵琶歌

新哈爾賓

下村無端作歌

牧野錦光作譜



大丈夫

天てんにうま生なれて天てんにしたが随まひ

天てんにつか事かへて天てんにし死しす

たゞ 束の間の 玉の緒も
世の起き臥しに 繋るらん

大宰 されば 従一位 大勳位

公爵 伊藤 博文卿

中干 維新 このかた 天皇の

御代を 輔けて 四十年

内に 文明の 政を布き

外に 平和の 策を建て

地ノ上 勳業 勢望

一世を 曠うして

地ノ上 聖上の

御覚えも 類ひなく

地ノ上 滄浪閣上 風清き

地ノ上 松ばら越しの 波や

白帆地ノ上 閑鷗かんを 友ともとして

優悠地 老おいの 樂たのしみを

重地ノ上ね得えつべき 身みながらに

國地ノ上に 許ゆるし、 赤ま心こころは

席地暖あたたまる 暇ひまも なく

曩地ノ上には 奥おく羽う 北きたの海うみ

韓地ノ下の 太子たいしの 道みちしるべ

この度たびは また 灘なだ 越こえて

しら雲くも 迷まよふ 長ちやう白はくの

山地ノ地の かなたへ かしまだち

東地ノ上洋やう 百ひゃく年ねんの 長ちやう計けいを

定ちやうめんちやう爲ための 旅たびとかや

松地ノ上かぜ 渡わたる 大おほ磯いその

秋あきも 身みに沁しむ 黄たそ昏がれや

地ノ上 朝野の名士に 送られて

地ノ上 首途の 姿 悠然と

地 汽笛 一聲 夕霧を

地ノ上 破れば 西へ 箱根山

地 越えて 芙蓉の 雪白く

地ノ上 御代の 光を 仰ぎつゝ

地ノ上 裾野の 露に 虫鳴きて

地ノ上 ひろき恵みぞ 偲ばるゝ

しゅうばんいへをじてえんていにのほれば
秋晩辭家上遠程

しやそうだんつきてちゅうせいなきく
車窓談盡聽蟲聲

めうちようほつかいなみせんじやく
明朝渤海波千尺

ちゅうこんをとらはんとはつすこれこのかう
欲吊忠魂是此行

地 船路に 移る 此處はしも

思地ノ上ひ出て多おほき下しもの關せき

鐵地ノ上嶺丸てつれいまるに身みを載のせて

瀨地ノ下戸せとを出いづれば玄界げんかいの

五百地ノ變化重へ八百重ほの浪なみまくら

振地ノ上り返かり

見みるも懷なつかしししき島しまや

そ地ノ下の山地ノ上々やまも何時い時つしかに

消地ノ下えて新しん月げつの影かげ淡たんく

遠地ノ上く彼かな方たを限くまどるは

四地ノ上年よとせの月つき日ひ公こう爵しやくが

一中世せい統とう監かんの綬いひを佩かびて

有つか司さを導みちびき民たみぐさを

喃はいくまれける高麗こうらいの國くに

ゆ本くては何處いづ過すぐる年とし

日ひの旗はた 紅かく 大和男兒やまとのおとこが

正義せいぎ 任俠にんげうの 血汐ちしほもて

染めし 戦争いくさの 場のあと

風かぜ 蕭々しやうしやうとして 星ほしは 牙きえ

浪なみ 澎湃ほうはいとして 舷ふなべりを 洗あらふ

船ふね 大連たいれんに 着つきぬれば

くわく しゃく たる 老體らうたい

温顔おんがん いとど 爽さわやかにして

あるは 歡迎くわんげいの 席上せきじやうに

東洋平和とうやうへいわの 義ぎを明あかし

あるは 旅順りよじゆんの 丘かの上へに

兵士つわいのどもが 靈たまを 弔とらひ

汽車路きしゃぢ 遙はるかに 北きたのかた

遼陽りやうやう 奉天ほうてん 打ち越えて

地ノ上
哈爾賓府にぞ

着かれける

切リ
哈爾賓府にぞ

着かれける

二、短銃の響

時はしも

明治 四十

有二年

十月 二十

六日の

切
朔風 凍る

朝曇り

大干
哈爾賓の

停車場には

露西亞の國に

名も著き

大藏大臣中干

ココフツォフ卿を 始めとし

文武の官 うち連れて

綺羅の 禮装 華やかに

露清の兵士 列を布き

王者を待つ の 禮容も

斯くやと見ゆる 此方には

わが 在留の 同胞が

名聲 東西に かくれなき

皇國の偉人を 迎へんと

襟を 正して 控えける

大藏卿は 公爵を

列車の 内に たち迎へ

握手の禮も ねむごろに

それがし 極東 軍團の

長官を兼ぬる身にしあれば

兵士ども、引具しつ

いかに貴賓もろとも

かれ等を閲みしたびてんや

公爵 莞爾と 打ち笑みて

「そは身に餘る譽れぞ」と

扈從の人々 隨へて

やをら 汽車を 降らるゝ

疎髯 霜降る 頤に

春 長閑なる 顔ばせや

上衣 豊かに 着ながして

右手に 恩賜の 杖をつき

碧眼 美髯の 藏相と

ならび立たれし 光景は

天下中千の大事もこの裡に
定まるべくぞ見えにける

劉曉中千起る軍樂の

聲 澄み渡る
そが間を

悠々 一歩
また一歩

露西亞地ノ上の兵士を
閱みし了へて

葉卷地の煙
ゆるやかに

次地ノ上の 一歩に
移りたる

あ、その刹那
その刹那

刹那中千 硝烟
併しりて

彼の 韓國の
暴漢が

徳に 酬ゆる
兇暴の

毒手に ひく
短銃の音

すわや 大事と
人々が

遮るさへぎ ひまも

あらばこそ

咄嗟とつさ 老公らうこうの

胸むね 深く

貫つらぬき とめし

彈丸たまごの數かず

公爵こうしやく 屹きつと

歩ほを 停とどめ

騒さわぎも やらぬ

言ことの葉はの

撃うたれたるぞと

聲こゑ 低ひくく

自若じじやくたる 神色しんしよく

おごそかに

威容ゐよう 正ただしき

まゝにして

一糸いつし 紊かたれぬ

風采かざりは

森もりを 踏ふまゆる

秋あきの山やまの

儼然げんぜん 四邊あたりを

はらみつゝ

げにや 日東にっとう

皇帝くわいていの

名臣めいしんとこそ

覺おぼえけれ

名臣めいしんとこそ

覺おぼえけれ

三、臨終

おぞましや

哈爾賓驛の

朝あらし

不慮のまがつみ

さそひ来て

歡呼の聲は

忽ちに

憂の色と

變りけり

あゝ天なるか

命なるか

豪氣堂々

大空にと

詠まれたる身も

しかすがに

急所の傷手

深ければ

列車を假の

臥床にて

刻を移さず

醫師等が

手を盡したる

介抱も

かへすよしなき

臨終の

盃地ノ上 把りて なみくくと

餘瀝地ノ上も 止めず 乾ほしたまひ

「撃中干たれしはそも 誰たれ々ぞ」と

聲地ノ上も たしかに 問とはれしは

末期地の 間まにも ひとの身みの

りへを 憂うれふる 眞情まことかや」

人々地ノ中 胸むねは 迫せまりつゝ

川上地ノ地 領事 森 詩宗

田中地ノ上の 三人 撃うたれしも

浅あさき手傷てきずに 候さふらへば

御心みこころ やすく おはせかし」

彼地ノ上の 凶漢しれものは その場ばにて

露西亞地の 官憲つかさに 捕とらへられ

朝鮮地ノ上 平安へいあんの 民たみなる由よし

分明地ノ上いたし 候さふらふと

申し聞しきこゆれば 領うなづきつ

おろかものの者よと 一言ひとことの

その言ことの葉はを 名残なごりにて

はや たえぐの 玉たまの緒おや

君寵くんちゆう 須臾しゆも 離はなれざる

恩賜おんしの 杖つゑを 握にぎり緊しめ

六十九年ろくじゅうくねん 誠忠せいちゆうの

光ひかりを こめし 眼まなざしも

眠ねむるがごとく 絆切こときれて

英魂えいこん 呼よべど とこしへに

逝ゆきて 空むなしき 瀛車きしゃの窓まど

憾うらみは ながく 雲くも 低ひくし

悼いたましいかな 博文公ひるぶみこう

蹇けん々く 匪躬ひきん 幾いくそとせ

寄よる年波としなみも 忘わすれつゝ

折地ノ上に觸ふての

物語ものがたりにも

中中に われ屍しかばねを

埋うづめんは

長白山頭ちやうはくさんとう

白妙しろたえの

深雪みゆきにこそと

申まうされける」

老おいて雄々おしき

のぞみをば

茲こゝに つくして

國くにの 爲ためめ

天下てんかの 春はるの

爲ためにしも

遠とほく 狄地てきちの

旅たびごるも

中中に 血染ちぞめの 袂たもと

く、れ、な、る、に、

花はな々々しくも

朔風しゅくふうの

す、さ、ぶ、が、中なかに

散ちり、給たまふ、

地地ノ上ノ上 されば 兇報きやうほう

傳つたはるや

地地ノ下ノ下 畏おそれ多くも

九重ここのへの

地地ノ上ノ上 御軫悼おんいたみとへ

いと深ふかく

「わたくしの

嘆きは たへも忍ぶべし

みくのにの爲を

いかにかはせん』

地ノ下

と

高崎翁の

詠じけん

地ノ上

歌の心は

五千萬

地ノ下

惜む涙の

村雨は

地ノ上

大和島根を

溢れ出で、

地ノ上

外国人の

袖にまで

切

かゝりけるこそ

道理なれ』

あはれ

皇國の

柱ぞと

世に

仰がれし

一本の

中千

花は あへなく

散りぬれど』

その

花の香は

千代八千代

敷島 まもる 民ぐさの

一つくくに 宿りつゝ

御代の榮えを 護るらん

御代の榮えを 護るらん

新曲 哈爾賓終

明治四十二年十二月二十二日印刷
明治四十二年十二月二十五日發行

著作權所有

作歌者 下村 環

發行者 大橋 新太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 石川 金太郎
東京市京橋區西船場町廿六七番地

印刷所 株式會社 秀英會

新曲哈爾賓 定價金拾貳錢

發行所 博文館

東京市日本橋區本町三丁目
發售所金口座東京二四〇番



大和田建樹君編

日本歌謠類聚

上下二冊中列上製脊皮總布紙數一冊一千餘頁
正價 一冊 金七拾五錢 小包一冊 金拾貳錢

- 目次
- 上代曲 大歌○童謡○
 - 近古曲 宴曲○謡曲○小歌○雜曲○
 - 中世曲 神樂歌○催馬○樂○風俗○今○
 - 近世曲 小唄○本手組、端手組、裏組、陸連組、弄聲
 - 附録 ○十二段草紙 ○道しるべ ○絃歌糸のみ ○謠文評釋

長井金升君校訂

俗曲大全

全一冊中列上製脊皮總布紙數一千八十六頁
正價 金七拾五錢 小包料 拾二錢

義太夫、一中、河東、富本、新内、蘭八、常盤津、清元等の淨瑠璃を始として端唄、祭文、都々逸その他小唄に到る迄三筋の糸に合せて語るもの謠ふもの種類を網羅し、古今の歌曲を集めれば真に大全の名に背かず文藝に遊ぶもの座右一部を備へざるべからず

博文館發行

佐々醒雪君著

俗曲江戸長唄

全一冊四六列總布上製 紙數二百七十四頁
正價 金五拾五錢 郵税金六錢

- 内容
- 江戸長唄總説
 - 三番叟(難題三番叟)
 - 道成寺(京鹿子娘道成寺)
 - 各種の道成寺(上方唄其他)
 - 草摺引(正札附根元草摺)
 - 各種の草摺引(蝶島千年藤其他)
 - 獅子(英執着獅子)
 - 各種の獅子と石橋
 - 吉原雀(教草吉原雀)
 - 手習子
 - 花車(花車岩井扇)
 - 賤機帯
 - 勸進帳
 - 勸進帳の由来(安宅勸進帳土佐節)
 - 安宅の松(阿取安宅の松)

水谷不倒君校訂

義太夫百番

全一冊洋裝刺半裁上製紙數千三百頁
正價 金壹圓 小包料金拾貳錢

博文館發行

大和田建樹君編

四

謠曲評釋

全九冊和裝美本紙數一冊二百五十頁以上
正價 一冊 金卅五錢 九冊金貳圓八拾錢 郵税一冊 金六錢

大和田建樹先生の謠曲通解出て、より茲に十有五年四方講讀者諸君の増加する事、年一年よりも多きは弊館の榮とする處、更に今般先生に請ひて大訂正を加へ、總説を増し、曲數を増し、註釋を増し、評語を加へ、總假名を附し、其他大に體裁面目を一新して謠曲評釋と名づく、全部を通じて曲名を伊呂波順に併列し、終に語釋の索引を附して讀者諸君に至便ならしむる如きは其最たるものなるべし

同君編 謠曲文粹

正價金參拾五錢 郵税金六錢

同君編 能のしをり

全六冊中判和裝 一冊金四拾錢 郵税金六錢

同君編 謠と能

正價金貳拾五錢 郵税金六錢

博文館發行



墨庭菘村君校訂

▼近松時代淨瑠璃

博文館編輯局校訂

▼近松世話淨瑠璃

水谷不倒君校訂

▼續近松淨瑠璃集

同 君校訂

▼近松半二淨瑠璃集

同 君校訂

▼並木宗輔淨瑠璃集

同 君校訂

▼紀海音淨瑠璃集

同 君校訂

▼竹田出雲淨瑠璃集

同 君校訂

▼文耕堂淨瑠璃集

同 君校訂

▼江戸作者淨瑠璃集

博文館編輯局校訂

▼淨瑠璃名作集

各冊洋裝四六判脊
皮校クロス美本
紙數一冊千頁以上

正價 一冊 金七拾五錢
小包料一冊 金拾貳錢

山崎紫紅君新作脚本

史劇 十二曲

全一冊洋裝四六
判裝華冊
紙數五百五十頁
正 金九拾五錢 郵税金八錢

最近二年間に於ける著者勞作の結晶物なり、上場せられて都下の劇壇を賑はしたる。

歌舞伎物語。その夜の石田。亂れ

笹松一木。信玄最後。當流鉢木。破

戒曾我。外明智光秀。戀の洞。三七信

孝。他。二篇

を収めたり。著者の脚本は所謂机上の瀟灑にあらず。而かも亦清新の氣に富みて通俗の態なし劇に志ある諸君一讀を乞ふ。

坪内文學博士序文 土居春曙君譯

新 社 會 劇

全一冊菊列上製美本
紙數三百四十一頁
正 金六拾五錢 小包金八錢

本書は勝利三清濁遺言一空想心設されたる文藝協會演劇研究所の教科書として用ゐらるゝもの

本書は著者が登場研究の経験により直に實驗に適せしむべく少からざる苦心と用意とを以て執筆せるもの

本書は新社會劇を研究せんと欲する初學者に取りては唯一の新楷梯たるを以て苟も劇に志せる者は本書に依りて私演期試み見よ四劇の新味を得得ると同時に我が將來の藝壇に資すべき清新の演法は自ら其間に發明せらるべし

（博文館發行）

文學士 小山内薫君著

演 劇 新 潮

全一冊洋裝四六判裝釘美紙數三百九十頁
正 金五拾五錢 郵税金六錢

俳優は讀め！興行主は讀め！好劇家は讀め！

この書は學問の書に非ず、議論の書に非ず、研究の書に非ず、舞臺演の組織より俳優の技藝に及び、俳優の技藝より脚本の解剖に及び

劇一切の實際的新思潮を平明なる文趣味の

書り年若き著者が勤劬演劇革新の心願は十

の美しき挿圖と共に此書の紙間に收めらる。

幸田露伴君校訂

和泉大藏 狂言全集

全三冊和裝中判横綴
一冊金五拾錢
郵税一冊金八錢

水谷不倒君校訂

脚本傑作集

全二冊中判脊皮總布
上巻發賣禁止
下巻金七拾五錢
小包料金拾貳錢

博文館發行

中村青江君編

新案福引

附 繪入地口百番
室内遊戯

三版

全一册四六列美本 紙數百六十四頁 正金拾八錢 郵税金六錢

本書は奇想天來の珍趣妙案一粒選りの福引題解五百餘を築め二十一種の類別を立て、景品を配當せるもの、附録には「繪入地口百番」挿圖と相俟つて腹の皮を捻らすべく「室内遊戯法」亦家庭團樂の絶好同伴なり

海賀變哲君著

日本文學遊戯大全

新版

全一册四六列美本 紙數三百五十九頁 正金四拾五錢 郵税金六錢

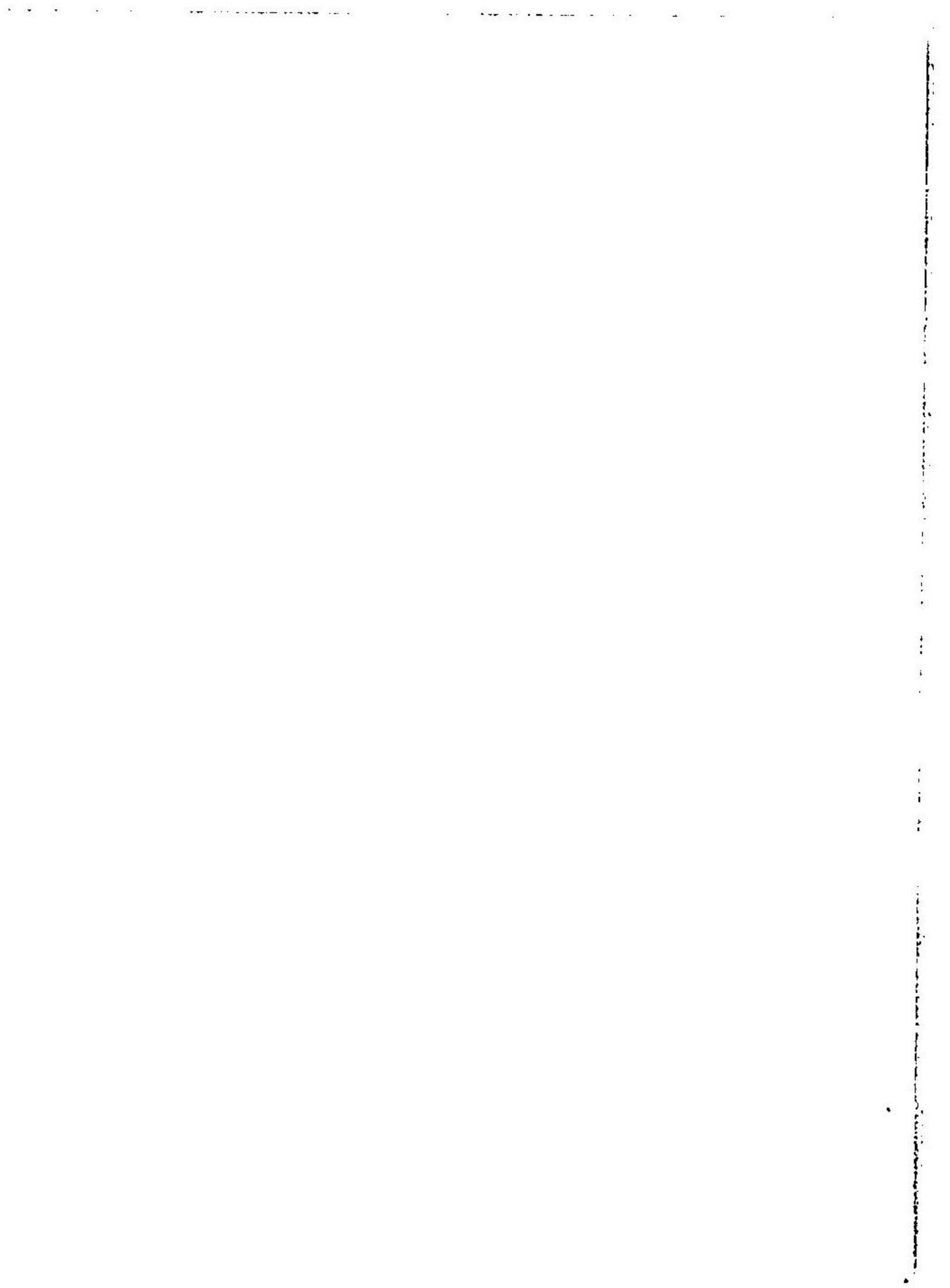
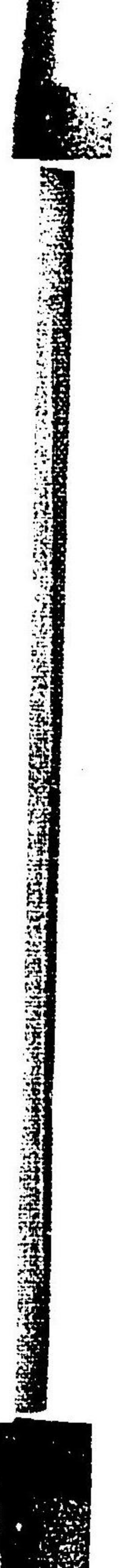
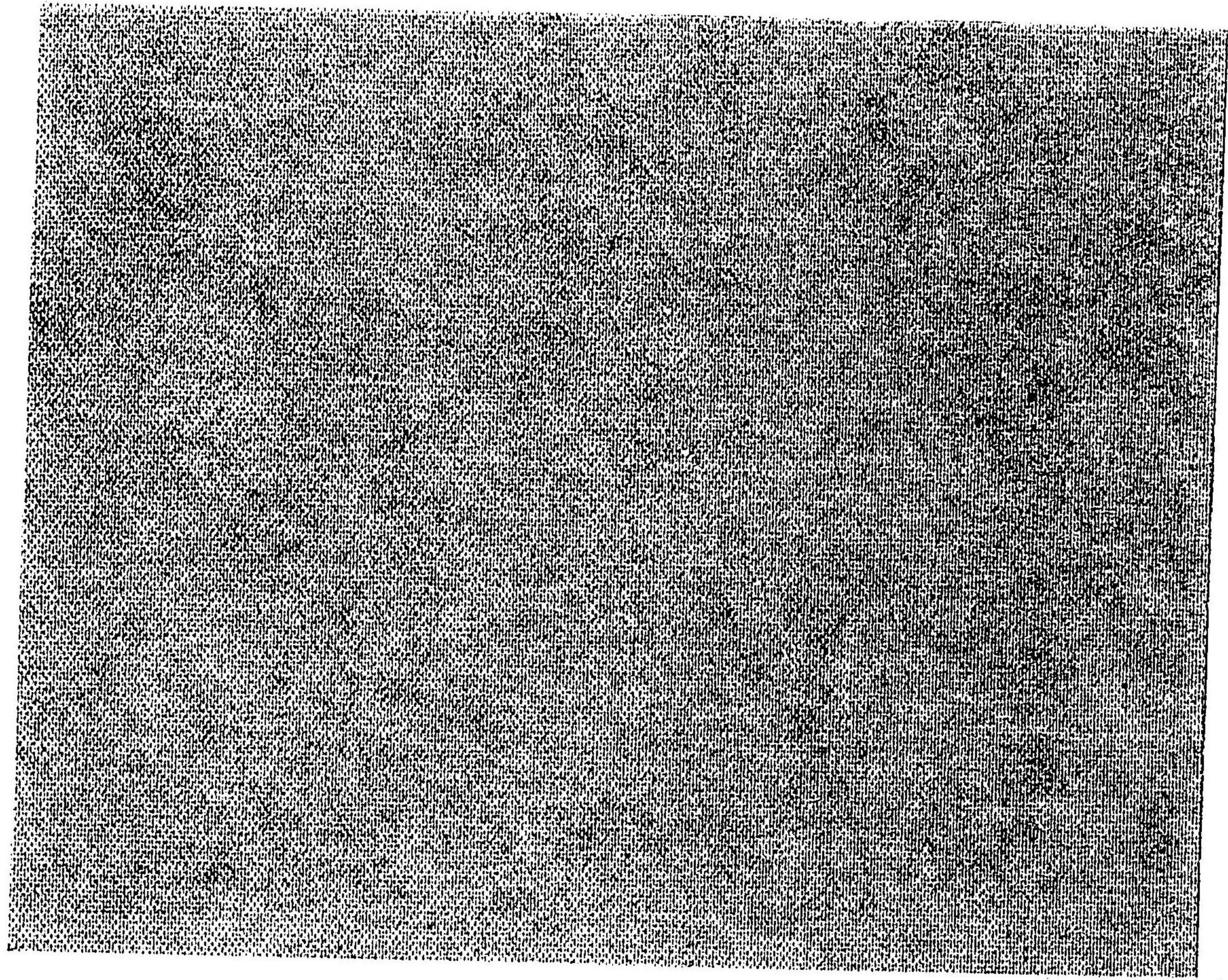
本書は我國の文學に關する遊戯の總てを網羅し其解説作法、作例等を最も平易に記述したるものなればいかなる初心者と雖も一讀して會得するを得べし近來の好著なり

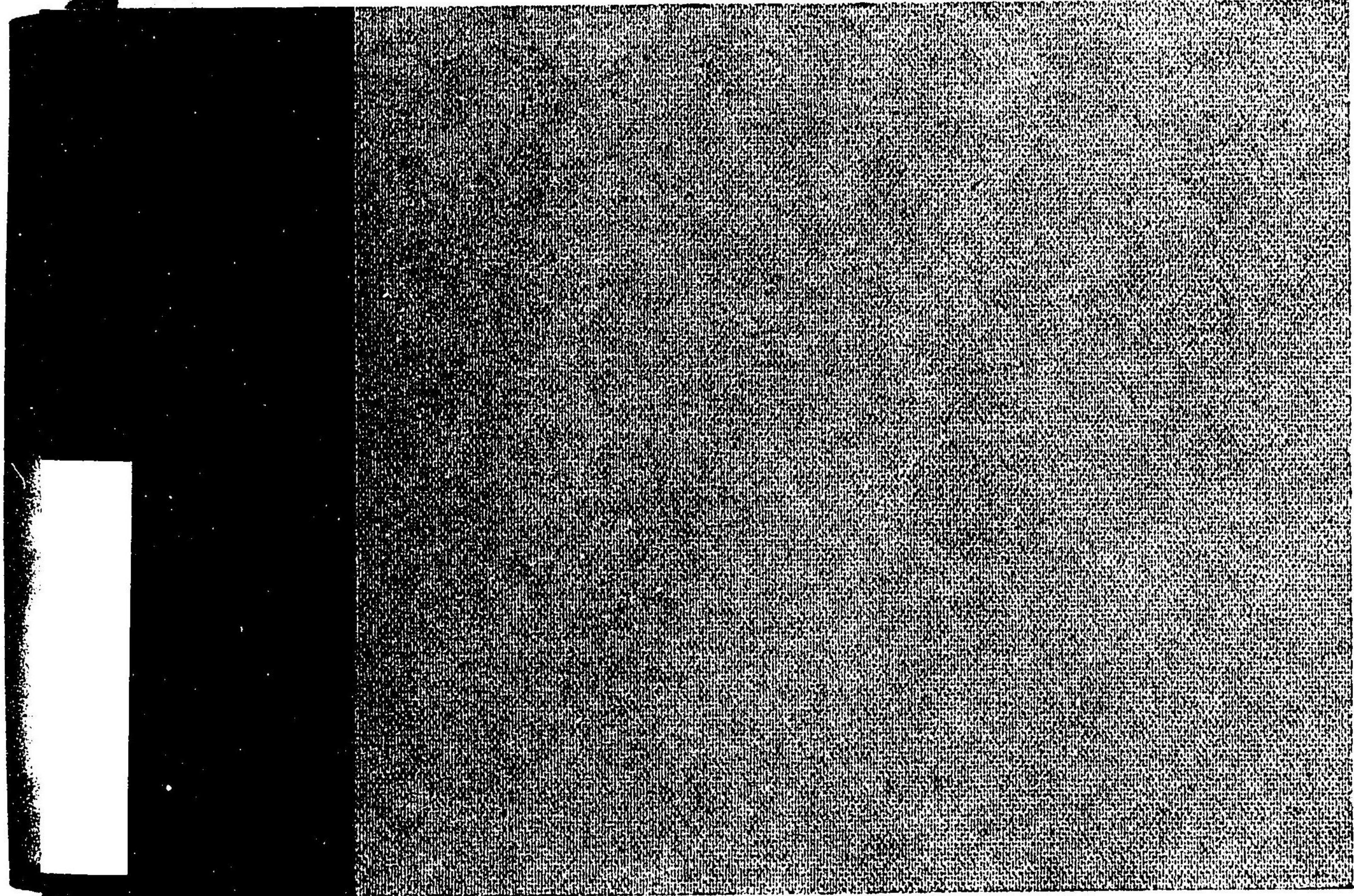
内 容
○語呂合 ○前句附 ○隱句 ○短對句 ○謎 ○下句附
○考物 ○のは附 ○冠附 ○文字鎖 ○經引 ○題文
○物名 ○遊藝返し ○天狗俳諧句 ○一口噺 ○無同學

博文館發行

259
958







特 23

235

琵琶歌
新曲 哈爾賓

国立国会図書館

074722-000-2

特 23-235

琵琶歌新曲哈爾賓

下村 無端 / 著

M42

CEJ-0318



